

# 通訳基礎力のための新聞活用： 学生が選ぶ「今週のニュース」

**News of the Week to Be Picked by Students**  
**—An Attempt to Build a Firm Basis for Interpreting—**

英米学科 袖川裕美

## **Abstract**

While language and interpreting, skills are essential for professional interpreters, they are not enough. Interpreters also need to have basic general knowledge in every field, including politics, economics, culture, science, and world affairs both in the source language and the target language, regardless of what subjects are being interpreted.

To help students acquire general knowledge, the author, who is also a simultaneous interpreter between Japanese and English, utilizes newspaper articles in her interpreting courses for both undergraduate and graduate level courses. Students are asked to pick two news articles once a week in Japanese and then two related English articles, focusing on the different perspectives of their news sources. They are also required to notate vocabulary and terms specific to the subject, file them as their “News of the Week”, and make a short class presentation in English.

According to student surveys, this assignment is greatly appreciated. They report that it gets them in the habit of reading newspapers in both languages and it helps spark their interest in specific issues, such as Brexit or US presidential election. The author also finds students’ picking up useful expressions for both speaking and writing English, thereby improving their interpreting skills.

When working, interpreters cannot be either activists or representatives of any particular ideology or mediators or negotiators of conflict. More, it is said that interpreters should be machine-like converters of language. In reality, interpreters are only human, and their personal "interpretation" is inevitable, as the word "interpreter" itself implies. Interpreters therefore have to be aware of how they might be influencing a discussion. To stay more neutral, interpreters

need comprehensive, overall understandings, and gaining more general knowledge can support this endeavor.

Although getting students to read newspapers does not seem a direct path to training professional interpreters, this paper shows that it is quite an effective and useful tool to develop global thinking and to train would-be interpreters.

## 1. はじめに

プロの通訳者になるには、語学力と通訳技術が必須であるが、それだけでは十分ではない。通訳者は、通訳の対象となる分野の専門知識だけでなく、政治・経済・社会・文化・科学・国際問題など、あらゆる分野の基礎的知識を身につけている必要がある。いわゆる教養が求められる。しかも、こうした知識は、起点言語と目標言語の両言語で蓄積される必要がある。もちろん、これらは一朝一夕に培われるものではなく、分野によって、知識にばらつきがあったり、濃淡があったりするのはやむを得ないことながら、通訳者はプロになっても一生勉強し続け、教養を積み上げていく。それが優れた通訳をする基礎となるからである。

こうした現実をふまえ、同時通訳者(英語⇄日本語)でもある筆者は、大学の通訳コースで学ぶ学生に対して、何が基礎力強化につながるかを検討した結果、新聞を活用することにした。本稿では、その具体的な方法とプロセス、これまでの成果について論じ、中間報告としたい。

## 2. 方法

筆者は、愛知県立大学のEIC(English for Intercultural Communication)(異文化コミュニケーションのための英語)コースを担当している。ここには、2年生(2016年度前期15名)向けにInterpreting I(通訳I)とIntroduction to Communication Studies(コミュニケーション学入門 2016年度後期16名)、3年生(同年度前期8名、後期4名)向けにInterpreting II(通訳II)とCommunication Studies(コミュニケーション学)が設置されているほか、大学院生(同年度前期1名+聴講生1名、後期2名+聴講生1名)向けに通訳演習・通訳研究コースが開設されている。これらのコースの受講者全員に、毎週、それぞれ自分の“News of the Week”を作成することを課題としている。2015年10月から一部のコースでトライアルとして開始し、2016年4月からは全コースの定期課題とした。

具体的には、

- 1) 毎週、自分の興味を引いたニュース記事(日本語)を2本選ぶ。
- 2) そのニュースに関連した記事を英語のニュース・ソースから選ぶ。英語のニュース記事は、日本語の翻訳である必要はなく、関連していればよい。
- 3) 記事の選択にあたっては、紙の新聞およびネット配信されているニュース素材を使う。愛知県立大学の立地から、多くの家庭で中日新聞を取っていると思われるので、学生は、日本語の新聞に関しては中日新聞に最も馴染んでいると推定されるが、全国に視野を広げるため、学生にはいわゆる全国紙の4大紙(朝日、読売、毎日、日経)にも目を向けるように指示。県大の図書館も、この4紙を定期購入しているので、アクセスに問題はない。  
また、英語のニュース記事については、The Japan Times(県大の図書館も定期購入)が日本では最も一般的かと思われるが、日本国内向けの英字新聞という性格なので、学生には英米で発行される他紙を中心に読むよう指示。ネット配信の英語ニュース(The New York Times, The Wall Street Journal, The Independent, The Guardian, BBC News, CNN News など)も有効である。
- 4) 選択した記事について、日本語と英語の語彙や専門用語を調べる。

- 5) ファイルを作成し、自分のニュース・ファイルを作成する。独自の知のストックが出来ることで、今後の卒論執筆の際の資料にもなりうる。一定の達成感も期待できる。
- 6) 授業では、毎回、学生全員が自分の選んだニュースについて簡単に英語で発表する。基本は、5W1H (When, Where, Who, What, Why and How) を押さえたものとする。2年生のEICは15人いるので、丁寧にやると時間がかかりかかるので、ひとりひとりの発表は1本とし、少し詳しく発表する学生を3人指名している。3年生のEICは4人、大学院生は聴講生合わせて3人なので、全員に少し詳しい発表を認めている。内容によっては、筆者が背景説明を補足し、クラスで discussion することもある。また、発表に際し、日本語と英語での扱いの違い、新聞による扱いの違いなどにも注目するよう指示している。

### 3. 経過

当初は戸惑い、かなり厄介な課題と感じた学生が多かったが、授業を進める過程で、学生の関心が広がっていった。また、筆者が担当する別の授業で、学生の英語のプレゼンテーション力が増していると感じることがあった。知識の蓄積にしたがって、学生の通訳力も向上している。これらの感触を具体的に確認し、かつ今後の課題を探るため、学生たちにアンケート調査(2016年7月)を行い、各自のニュース・ファイルを提出させた(2016年7月)。また、再調査のためレポートも提出させた(2016年11月)。

#### 3.1 アンケート調査の結果

アンケート調査の結果、26人中25人の回答を得た。母集団が30人にも満たないので、統計的な処理は控えめにし、以下に質問と主な答えを提示する。

質問① 何を中心に選択したか。

##### Interpreting I

分野は気にせず、興味のあること。通訳に役立つようなテーマ。選挙。イギリス社会。国際テロ。日本の政治(参院選、安保法案)。スポーツ。世界のトップニュース。1本は日本関係、もう1本は外国関係。興味の湧かないものは取り上げない。イギリスのEU離脱をめぐる国民投票。テレビで気になったニュース。

##### Interpreting II

自動車。政治。銃乱射事件。社会問題。地震。へえーっと思うようなニュース。アメリカ大統領選。オハイオ州のニュース(留学するため)。他の学生が選ばなさそうなニュース。娯楽。経済。IT関係。

大学院

政治・外交(中東問題)。経済。差別問題。

質問② 興味が増したか。

変わらないとの回答が1件あったが、後は全員、興味が増したと答えている。数字的には、実に96%の学生が、興味が増したと答えている。

質問③ 勉強上の効果はあったか。

あった場合はどういう効果か。ない場合はどうしてないか。

語彙や表現が増えた。知っている単語でも違う意味があることが分かった。短時間でニュースを理解し、まとめて人前で発表する力がついた。日本語と英語のタイトルの付け方の違いを知った。新聞の文体に慣れてきた。定期的に新聞を読むようになった。例えば、日中関係についての海外の意見はどうかなど、自分の知らなかったことに対する理解が進んだ。社会とのつながりができた。興味があるニュースを選べるので、新しい単語を覚えやすい。政治について少しは考えるようになった。ユニークなニュースにも目を向けるようになった。クラスメートが驚くようなニュースを探すようになった。

勉強上の効果については、「興味が増したとは思わない」と答えた学生も含め、全員(100%)、効果があったと答えている。

#### 質問④ 楽しいか、つまらないか。

楽しいけど苦しい。つらい(大変だ)けど楽しい。最初は面倒だと思ったが、意外に楽しかった。めっちゃ楽しい。他の人のニュース発表を聞くのも楽しい。

「楽しくはない」との回答が1件あったが、後は全員「楽しい」と答えている。数値で表すと、96%となる。

#### 質問⑤ その他

県大のプリンターは利用枚数に上限があるので、1週間に1本にしてほしい。日本語のニュースと英語のニュースを合わせるのにかなり時間がかかるので1週間に1本にしてほしい。語彙や表現は増えるが、すぐ忘れてしまう。

### 3.2 学生のレポートから

#### i) 2年生

- 新聞を読むことが習慣になってきた。読んで知ることが楽しみになってきた。新聞社によって違った書き方をされていて面白い。他のクラスでも、記事を読んでいたおかげで背景知識があったので授業に参加しやすかった。アメリカ大統領選について、政策やスキャンダル、支持率などについて調べてあったことが有効になった。

逆に他の授業で取り上げた話題について、最近はどうなっているのか気になり、記事を選ぶこともある。英語で分らない単語はもちろんあるが、日本語でも分らない単語や耳慣れない単語を見ることがある。フォーマルな新聞用語を覚えるいい機会。

- 語彙力強化につながっている。自分にとってはなじみのない言葉(例: vigilance 警戒、xenophobia 外国人嫌い)に出会ったり、高齢化社会は aging society 以外に greying society と言ったりすることも学んだ。また、ニュース記事を読むことで、他のクラスの授業に役立った。世界で何が起きているのか関心を持つようになった。

- ニュースに気を配るようになった。日本語と英語の新聞記事を読み比べると、どんな事件が世界的に注目されるのか分かってくる。2本選ぶときに1本は政治に関する記事を選ぶようにしている。これまで触れたことのないような語彙に触れる機会が増えた。また JICA 職員の殺人事件については、説明に使う語彙が違うため、英語では、日本語の新聞では分らないようなことまで分かってしまい、衝撃だった。

- アメリカの大統領選を中心に記事を選んだ。候補者に関心を持つようになった。日本語でも英語でもニュースが理解しやすくなった。スマホの podcast で NHK World Radio Japan を聞き始めたが、ニュースの背景が分かってきたので、理解できるようになってきた。

- イギリスの EU 離脱に関連した記事を集めて読むうちに、日本語と英語の両方でイギリスに関する知識が深まった。他のクラスで Brexit について発表するクラスメートがいたが、そのときも質問や意見を出せた。Brexit をめぐる国民投票について読むうちに、アメリカ大統領選にもつながる語彙が増やせた。とっつきにくい内容のものでも、毎日、新聞を読むことで親しみを持てるようになった。

- アメリカの大統領選で、ドナルド・トランプ氏が nasty woman(いやな女), bad hombres(悪い奴ら), deplorable(嘆かわしい), irredeemable(救いがたい)などという言葉を使ってライバルのヒラリー・クリントン氏らを攻撃していた。自分がこうした言葉を使わなくても、会話のためには知っておく必要があるので、その点からも大統領選の記事を読んでよかった。

- 二か国語(英語・日本語)の新聞記事を比較すると、英字新聞では1つの単語に2つ以上の形容詞が装飾されていたり、似た意味の2つの名詞による並列表現が多くみられるが、日本語では1語で表されたりしている。両言語の間で完全に相互交換が可能な単語や表現はほとんどないために、2語以上を組み合わせる意味を補完するケースがあることが分かってきた。クラスで「一般的な知識」という意味で common understanding と言ったところ、先生(=筆者)から、意味の幅を持たせる訳例として、common sense and general knowledge を示された。

- 「キツイ」という意味では hard ばかり使っていたが、他の人のニュース発表で demanding を使っていたので、自身も試してみるようになった。自分が調べたニュースの続報が気になるようになった。例えば、ボブ・ディラン氏のノーベル文学賞受賞に関して、今後どのような対応をするのか関心を持っている。

- 英語のニュースが速く読めるようになってきた。ニュースの扱いが日本語と英語の新聞で違うことがあるのが分かる。例えば、国連で核兵器禁止条約の決議が採択されたが[被爆国でありながら日本はこれに反対に回った]、日本語の新聞では一面で扱っていたのに対し、The New York Times では記事がなかった。思えば、アメリカは、核兵器大国だった。

- 国際関係への理解が進んだ。悲惨なニュースが多いが、希望を与えるニュースもある。また、普段は使わないような語彙を覚えた。allegedly, claim of responsibility for, disarmament など。

## ii) 3年生

- 読書好きではなかったのですが、これまで新聞もインターネット記事もあまり読んだことがなかったが、この課題を通して読むのが好きになった。みなと記事について話すのは楽しい。他の学生の意見やニュース記事の紹介も、知識を増やし、好奇心を刺激されるものだ。

熊本地震で受け入れ側が、ボランティアに対して、自分で泊るところを確保してから来てほしいと言っていたのを見て、自分は単純にボランティアがいいと思っていたので、いろいろな考え方があると思った。また英検 1 級のインタビュー試験では、与えられたトピックについて、ニュースのトピックを基に 3 つのポイントを示すという学習が生かされた。

- 他の学生の記事紹介を通して知る世界が、視野の拡大につながる。英語の記事を読むと、同じことを別の表現で言い換えている場面が多い。たとえば街路樹伐採計画反対運動では、伐採を be moved, be cut down, be felled などと言い換えていた。アメリカの次期大統領について情報を得ることは、今後の日本への影響や世界情勢を考えていく上で必要

なことだ。また電通社員の過労死は、これから社会に出ていく学生にとって、どのような会社で働きたいのか、自分が同じ状況に置かれたらどう行動すべきかを考えるきっかけとなった。

- 普段目を通さないような海外のニュースを読むようになった。アメリカの大統領選についても、アメリカ本国とイギリス、日本では捉え方が違う。それぞれ自分の国との関係で見ているからだ。海外の論調は日本とは異なった視点に立っているのも、新しい考え方を知る機会になる。自分の専攻はアメリカの文化、特に人種差別問題なので、人種差別の巣窟ともいえるアメリカのメディアに目を通すことで、その現状や実態をまざまざと知ることができる。

- 日本語のニュース・サイトと英語のニュース・サイトでは、レイアウトや写真の活用が違っていて楽しめる。また、タイトルの違いに関心を持つようになった。例をあげると、

中国人観光客 増加傾向: 30% of tourists are Chinese

外国人に抵抗感「近隣」4割 「同僚」2割: 40% “uncomfortable” about increasing foreign population

病院バス亭事故 アクセルとブレーキ踏み間違えか: 84-year-old man drives car into bus stop, killing 89-year-old woman

背景の分からないニュースを選択すると日本語でも理解が難しいので、他の授業に関連するトピックか、自分がよく知っているものを選んでいく。今後は政治や経済からも選ばなくてはならないと思う。

### iii) 大学院生

- 中東問題について少し理解できるようになった。ジャーナリストの後藤健二さんが亡くなったときに、自分が中東問題について全く注意を払ってこなかったことを恥じたので、調べる機会が増えてよかった。新聞の文体に慣れてきた。

- 政治や世界情勢だけでなく、そこから転じて経済ニュースを調べてみると、他の分野への興味も湧いてきた。同じテーマのニュースを日本と海外のメディアで比較することにより、問題のとらえ方や表現の差異に気づく。どんなニュースを発表したら、みんなが関心を持つか考えるだけでも楽しい。

- 最初はとっつきやすいニュースを選んでいったが、最近は自分では普段読まないようなトピックを選んでいく。科学や政治、経済が苦手だが、なるべくいろいろな分野から選んで語彙を増やしたい。発表することで緊張感があるので、普段より単語が覚えられるような気がする。同じトピックでも、新聞によって色々な表現が使われているので勉強になる。定期的に読む習慣ができ、非常に効果的だ。

### 3.3 使用するニュース・ソースと選択するニュースの傾向

上記のアンケート調査、レポート、ニュース・ファイルを基に、学生が主にどのニュース・ソースを利用しているか、どんなニュースを選択しているかについて述べる。

日本語のニュース・ソースは、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、中日新聞、NHK News Web、TBS News i が多い。産経新聞、日経新聞を挙げた学生もいたが、ごく少数で頻度も少ない。

英語のニュース・ソースは、The Japan Times が圧倒的に多く、The New York Times がこれに続く。BBC や CNN のニュース・サイトの利用者もかなり多い。The Guardian、The Independent、The Wall Street Journal、The Telegraph、Yahoo.UK、Global Times など少数ながらあった。また、英語のニュースについては、紙の媒体を読むことは皆無に近いようだ。

どのニュース・ソースを使うかについては、学生によってかなり違いがある。朝日と The Japan Times の組み合わせのみというケースもあった。今後、ニュース・ソースの拡張を促したい。

次に、何を選択するかについても多種多様であるが、海外のニュースでは話題性の高かった Brexit(イギリスの EU 離脱)とアメリカ大統領選が関心を集めた。銃乱射事件や自然災害のニュースも選択されやすい。一方、経済、科学は不人気である。

筆者が、学生に、関心あるテーマに絞って継続的に追及することを推奨した結果、毎回のように、自動車関連、IT ゲーム関連を取り上げる学生もいる。また、2本のうち1本は硬派なテーマを選ぶように示唆した結果、自衛隊の海外派兵・安全保障、TPP、原発問題、中東問題などを選ぶ学生も出ている。ひとつのテーマを深めることで、他のテーマへの切り口が出来るので、今後も、基本的にこの方針を維持するつもりである。が、一方で、複雑な背景をもたない“単純な”事故・事件のニュースを中心に選択する学生もいるので、関心の幅を広げるよう指導したい。

なお、ファイルには、調べた語彙の意味が記されているだけでなく、自身のコメントを英語で記述したり、イラストをつけたりしている学生もいた。こちらの想定を上回る勉強や創意があるのは、嬉しい驚きだった。

### 3.4 好ましい変化

上記のことに加えて、教師として授業で観察された好ましい変化を2点述べる。

- i) 通訳クラスで、アメリカの大統領候補だったドナルド・トランプ氏とヒラリー・クリントン氏のスピーチを素材として通訳訓練を行なったが、大統領選について知識が増えてくると、学生の通訳力が増してくるのが分かった。
- ii) ゼミでは、日本語の課題図書のリポートも英語で行なうことにしているが、当初はほとんど理解不能だった学生たちの英語が、徐々に、伝達力のある英語に変わってきた。学生に尋ねると、英語のニュース記事を読むときに、この表現は使えると思うと、それを書きとめ、実際に活用しているとの答えが返ってきた。

## 4. 今後の課題

以上のことから、News of the Week がきわめて有効であることが立証されたと思われる。ただ、この試みを始めてからまだ1年にも満たないので、今後、この方法を継続・発展させていく上での課題についても触れておきたい。

毎週の作業であるため、学生たちに「慣れ」が生じ、マンネリ化する恐れがある。英語で発表するため、取り敢えず英語のニュースだけを見てくる傾向も出てきている。英語の語彙に気を取られ、日本語の語彙への関心が薄くなりがちである。大半の学生にとっての母語であ

る日本語力は、通訳になるためには必須だが、通訳にならずとも、思考力・教養の基礎となるものなので、つねに日本語への注意を喚起したい。

次に、ニュース選択が安易になるケースが散見される。いつも簡単なニュースしか選んでこない学生もいる。ニュース・ソースも限定的である。当初はそれでも有効であるが、今後は、さまざまなニュース・ソースに目を向けつつ、テーマの深化と新たなテーマへの拡大をともに進めるよう、指導していく必要がある。

特に、ニュース・テーマに関しては、経済ニュースを苦手とする学生が多いことが懸念される。経済の基本について説明を加えても、全体的に反応が鈍い。経済に関心が薄いということは、今後、社会人として働くことを考えると問題である。しかし、通訳やコミュニケーション学の授業だけで、これらをカバーするのは限りがある。経済やビジネスに関する講座の強化については、大学全体として取り組むよう訴えたい。

またこの問題は、講座配分だけでなく、コマ内の時間配分という問題にもかかわる。News of the Week は、これだけで一コマ 90 分を使える内容であるが、現実には一コマのうちの 20-30 分くらいしか充当できない。内容を深めるには時間が足りないということも指摘したい。

なお、最近、朝日新聞が、Newspaper in Education (NIE)「教育に新聞を」と称する取り組みをしているのを知った。英語とのからみはなく、高校までの学校の授業で、新聞を活用するため、「新聞授業ガイドブック 改訂版」や「新聞授業実践ワークブック」などを提供し、先生方を支援しているという。藤井豪氏(明治大学文学部特任教授)が、生徒の「メディアリテラシー」育成の必要性を述べていた。今後はこれらも参考にして、News of the Week を充実させたい。

## 5. 結論

通訳者は、通訳中は自分の主張や信条は脇に置き、中立・公正な立場でコミュニケーションを仲介しなければならない。機械のような言語転換が理想と言われることさえある。ビジネスの商談であれ、貿易や紛争など国益をかけた交渉であれ、この原則に変わりはなく、特定の側が有利になるような通訳をしてはならない。しかし、通訳者を表す英語の“interpreter”の原義が「解釈する人」であることから分かるように、実際の通訳には、通訳者の解釈が介入する。通訳が人間的な活動であるかぎり、これは必然的なことだ。すなわち、通訳者の判断や考えが、陰に陽に議論に影響を与える可能性があるということだ。そうであればこそ、通訳者は、物事に対する総合的かつ包括的な理解力、さまざまな知識や教養を身に付け、偏りのない公正な通訳を目指して修練する必要がある。

学生に日英両言語で新聞を読ませることは、通訳者養成に直結する方法ではないかもしれないが、News of the Week の試みが国際的な視野や思考の獲得、および通訳基礎力の強化に極めて効果的であることは、本稿によって示されたであろう。担当クラスの中には、中国出身者やフィリピン出身者も含まれていることもあって、課題の負担の度合いはそれぞれ異なるが、これらの学生からも好反応を得ているので、この方法を継続・発展させ、さらなる成果につなげたい。

2016年11月16日、愛知県立大学の通訳翻訳研究所の招請により、戦後日本の通訳界を牽引してきた小松達也氏が「通訳の楽しみと英語」と題する講演を行なった。ここで、小松氏は通訳に必要な能力として、言語能力＝言語力＋知識＋分析力をあげた。これは Daniel Gile の説に準拠するものだが、小松氏は、自身の長年の経験から、KLを当然の前提として、ELKとAの重要性を強調した。

Comprehension =

KL (Knowledge of the Language) +

ELK (Extra-Linguistic Knowledge) + A (Analysis)

第3のポイントであるAの分析力に関する論考は次の機会に譲るとして、小松氏の主張は、かねがね筆者が考えてきたことと合致するものだった。英語力の指標とされるTOEICの得点は、もちろん高いことが望ましいが、これはKLの一部を表しているにすぎず、高得点を得ても通訳ができるわけではない。

世間には、英語ができれば通訳は自動的にできるというような思い込みが流布しているようだが、小松氏の主張はこれを打ち破るものだった。知識の蓄積途上にある学生に通訳スキルを教える際、ELKとAへの配慮がいかに重要かということが指摘されたのである。小松氏の講演は、ELKを培っていくうえで、新聞活用のNews of the Weekの有効性を傍証するものであった。

## 参考文献

小松達也 (2005) 『通訳の技術』 研究社

袖川裕美 (2016) 『同時通訳はやめられない』 平凡社新書

藤井剛 (2016) 「主権者教育と新聞」 from

<http://www.asahi.com/shimbum/nie/news/20160212.html>

Daniel Gile (2009) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training* (John Benjamins Translation Library, vol.8), Revised edition, Amsterdam & Philadelphia

Haidee Kruger, Agnieszka Chmiel, Dorothy Kenny, Daryl R. Hague, Michail

Sachinis & Andrew Jameson (2012) Book Reviews, *The Interpreter and Translator Trainer*, Volume 4, Issue 2, 2012 from

<http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/13556509.2010.10798897?journalCode...>

ELK - The Most Important Factor In The Comprehension Process Of Interpreting, *Academic Writings*, October 23, 2012, from

<http://whostar2401.blogspot.jp/2012/10/elk-most-important-factor-in.html>